日本行動計量学会
計量学会会報
第28号
1982年10月25日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

パソコン雑感

藤田廣一

最近のパソコンの普及は目覚しいものである。ちょっと一晩豪遊するのを倹約するぐらいで、パソコンが購入できる。趣味として個人で買って楽しんでいる人も少くない。

これに伴って、ソフトウェアも完備してきた。昔は、むずかしい理論と、プログラムの技法を同時に学ばなければならなかったのが、既製のソフトウェアが簡単に入手できるようになった。

データを入力するだけで、いろいろの分析をし、その結果を美しいグラフとして出力してくれる。昔は平均値や分散を求めるのさえ、たいへんな手間がかかったのが、近頃ではどんな分析手法でも、ほとんど手間をかけないでできる。

またデータの入力もなるべく自動的に行いたいというので、新しい入力装置がつぎつぎに開発されてきている。人間はなにもしなくても結果が出てしまう。

確かに便利な時代になったものである。ところが、どうも少し変な傾向が現われてきたのではないかと思われる。

どんな分析手法も、その裏にはっきりとした考え方がある。ある仮説の上に立っており、その仮説が成り立つ条件の範囲でしか有効でない。ところが、すべてが自動化されてしまうと、出発となる立場も、途中の計算過程もすべて無視されて、結論だけがもっともらしく示される。これでは、何をやっているのかわからない。

入力のデータも、また出力された結果を利用するのも人間であり多くの分析手法は、人間の直観をより定量的に表現しようとしているのであるが、この点を忘れて、結論だけを手軽に入手しようとする。そこには人間の洞察力の入る余地はまったくない。これでは分析結果の有効な利用は望むことはできない。入力を観察してみる。出力もできるだけ直接に観察してみる。そこでデータの意味を考察して、最も合理的な結論を出すように分析する。あるいは、結論さえ出さず、ある処理をした結果をできるだけ観察しやすい形式に表現して、そのまま観察者に提供する。

それを観察し、判断する人は、同じデータから異なった結論を出すかもしれない。これが人間の社会の常識である。同じデータからある人は慎重にしろという消極的な結論を出し、また別な人は、積極策を提案するかもしれない。この人間の判断を柔軟にできるようにするのがデータの処理の目的であり、結論そのものを出すのが目的ではない。

あまりに便利になったために、生のデータを直接に観察して洞察する習慣を失ってしまうのではコンピューターの普及も、分析手法が広く知られることも、あまりうれしいことではない。

（日本行動計量学会理事・
慶應義塾大学理工学部教授）

第十一回大会は京都大学で開催
会期は九月一・二・三の三日間

昭和五十八年度の第十一回大会は京都（京大会館）で開催することが正式に決まりました。会期は昭和五十八年九月一日（木）から三日（土）までの三日間です。現在、木下冨雄氏（京都大学教養部）が開催に向けて意欲的に計画を練っておられます。

来年度の大会で学会も満十年目になります。京都大会を他の学会にはみられないような活発な研究討論の場にしようではありませんか。多数の研究発表の申込みを期待しております。

第十回大会報告

大会実行委員長　野元菊雄

第十回日本行動計量学会大会は八月二十五日から二十八日まで四日間東京で開かれました。

担当は国語研と統数研で、例年の形のものは最初の三日間で会場は国立国語研究所でした。十のセッションでの研究発表はいつものとおりでしたが、第十回記念ということで本年はパネルディスカッション「行動計量学は何をもたらすか」の題のもとに各分野の方々に、十年目に入るこの新しい学問の過去を振り返り、将来への展望を語っていただきました。

特別テーマとしては「居住環境と人間行動」ということで行動計量学のこれから伸びるべき分野について考えました。

第十回記念として最終日には公開講演会を日経ホールで開きました。講演は林知己夫理事長の「日本人論と行動計量学」、林大氏の「言語行動の国際比較」で、これは一日目の特別講演、中西尚道氏の「日本人の生活時間の変遷」とともにますます国際的な視野の要求されるこの学問の将来への方向を示したものと言えます。

公開講演会は一般への宣伝には努めましたが、入場者数は期待に反して少なく、この点次の十年の問題となるように思いました。

最初の三日間の会場は学生のいない機関で、多少の不便を会員にかけましたが、初めての試みとして研究所紹介の展示をし、認識を深めていただいたことを感謝しています。

大会事務局報告

今大会の運営には、国語研から野元実行委員長、江川清、佐藤亮一、杉戸清樹、高田誠、中野洋、南不二男、米田正人の八名、統数研から鈴木達三副委員長、駒澤勉、中村隆、馬場康維の四名、計一二名が実行委員として参加しました。

国語研を会場とした大会初日からの三日間の異なりの参加者は二〇〇名でした。その内訳は、正会員一六五名、準会員一四名、非会員一八名（招待者三名を含む）、賛助会員三名です。発表件数は、一般研究五七件、特別テーマ四件の六一件でした。この三日間の参加状況は右表の通りです。

また、大会第四日の公開講演会（日経ホール）の参加者は、正会員六二名（講演者二名を含む）、準会員一名、非会員五三名、賛助会員二名の計一一八名でした。

この四日間の大会は各会場で活発な討論がくり広げられるなど概ね盛況裏に幕を閉じることができました。これは会員の皆様をはじめ、会場関係者各位、アルバイタ諸氏のご協力の賜物と深く感謝しております。

また、公開講演会を無料で開催するに当たって下記の十団体より多大なご寄付をいただきましたことをご報告し、合せて略儀ながらこの紙面を拝借して、各団体の皆様に厚く御礼申上げます。

最後に、来年の十一回大会の成功を祈り報告を終えます。

（大会事務局・江川清、駒澤勉）

≪関連記事、7ページ≫

セッション等の別	発表件数	出席者
第1日		
A 社会Ⅰ	五	三三
B モデル	五	三一
C 総会	(一)	四〇
D 特別講演	五	八三
社会Ⅱ	五	三三
分類・データ解析	五	五五
第2日		
E 数量化・多変量解析	六	六一
F 医学情報処理	七	一九
G 言語	(四)	二二
特別テーマ	七	四七
懇親会		四三
第3日		
H 尺度構成法	五	四二
I 調査法	六	二七
J 知覚・評価	六	二六
パネルディスカッション	(五)	一〇一

◇寄付をよせられた団体名

（株）朝日広告社
（株）三省堂
（株）絢文社
（株）筑摩書房
（株）電　通
（株）電通リサーチ
動脈硬化予防研究会
（株）ビデオリサーチ
（株）フジミック
（財）吉田秀雄記念財団

〝公開講演会の要旨集〟を差上げます

去る八月二十八日に開催された公開講演会の「講演要旨集」に残部があります。ご希望の方には無料で差上げますので、ハガキにてご請求下さい。なお、部数に限りがありますので品切れの場合はご容赦下さい。

◇請求先：〒一一五　東京都北区西が丘三－九－一四　国立国語研究所　江川清

会議議事録

▲理事会（七月二十六日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　十名

1　五十六年度決算について事務局報告のものを小修正、監査を経て総会に提出することとした。

2　五十七年度予算案は事務局提案のものを承認、総会にはかることとした。

3　会員増を目指し建築関係などの分野に積極的に入会を呼びかけるとともに、会員獲得担当理事を設けるべく検討する。

4　海外会員のあつかいについて組織担当理事で検討、案を作成することとした。

5　学会誌寄贈を公共性、国際性を考慮して行うこととした。また、抄録を発行している海外機関に寄贈、欧文誌の宣伝にも力を入れることとした。

6　大会準備進捗状況、各種委員会（編集・運営・刊行物）の活動状況の報告があった。

◎会員数（十月十三日現在）
（正）九三三人（準）一二九人
（賛助）三一法人

▲理事会（八月二十五日）
於　国立国語研究所
出席者　理事・監事　十三名

1　五十六年度決算報告について事務局より宮原、開原両監事の監査をうけたむね報告があり、これを承認、総会に提出する。

2　五十七年度予算案については前回理事会で承認ずみの原案に沿って総会にはかる。

3　来年度の十一回大会開催校は京都大学とすることを正式決定（会期は九月一、二、三日）。開催責任者の木下冨雄理事から方針等の説明があった。また十二回大会については、大会担当の野元理事より東工大と接渉中との報告があった。

4　学会の今後十年の運営について衆知を結集、発展をはかる。とくに事業計画、組織検討担当理事は具体策を本年末までに提出することとした。組織検討のために野元理事、宮原監事に協力を求めることにし承認された。

5　学会誌の内容に関して、環境政策科学といった学際的色彩の濃い分野での応用例を積極的に掲載したいなど意見交換がなされた。

▲第十回大会総会（八月二十五日）
於　国立国語研究所
〔挨拶〕開催機関（国立国語研究所・野元菊雄所長）
学会（林知己夫理事長）
〔報告および議事〕（議長・杉山明子運営委員）

1　昭和五十六年度事業報告、同決算報告（肥田野編集委員長、池田和文誌幹事長、松原欧文誌幹事長、駒澤運営副委員長、柳井刊行物委員、事務局）。

2　会計監査報告（宮原・開原両監事）。

3　昭和五十七年度事業計画、同予算案（原案どおり承認）。

〔実行委挨拶〕（鈴木達三副委員長）。

≪関連記事、2・4・5ページ≫

▲運営委員会（八月二十七日）
於　国立国語研究所
出席者　運営委員・事務局　十一名。

飽戸委員長が海外出張のため駒澤副委員長が司会をつとめた。

1　江川広報担当委員から会報を年度内にあと二回発行予定、記事として「メキシコでの国際社会学会報告（鈴木達三氏）」のほか北米（高根芳雄氏）、ハワイ（飽戸弘氏）、米国（水野欽司氏）における行動計量学的研究の動向などを掲載予定との報告があった。なお、江川氏は研究業務上、今年度内に広報係を辞退したい旨発言があり承認された。

2　今後の月例シンポジウムは、日本人関係（飽戸弘氏）、言語行動関係（江川清氏）、計量医学関係（久保武士氏）を計画中（杉山委員報告）。

3　丸山講習会担当委員から草津での合宿が大好評であったので今後冬期、夏期の合宿形式の研修会、セミナー開催を計画するとの提案があり承認された。

4　関西地区における理事と運営委員の役割分担を調整し運営の円滑化をはかり、他の地区活動についても充実化をめざし検討をすすめることとした。

5　小グループ研究会の復活意見が出された。具体的に「社会調査技法研究会」を発足させたい旨の要望が出ており、今後の学会活動の一つの課題として小グループ研究会のあり方を早急に検討することにした。

昭和五十六年度決算と五十七年度予算について

先の第十回総会（国立国語研究所）で昨年度の決算（5ページ）と本年度予算（4ページ）が承認されましたので報告いたします。

昨年度は、当学会が日常業務の多くを外部委託にして出発した最初の年でもあり、決算結果を心配していたのですが、約二三五万円（末刊の和文誌9巻2号の予価九〇万円を含む）を本年度に繰越すことができました。会員諸氏のご協力と前事務局の水野欽司理事の献身的ご努力のたまものです。また会計監査では、大変お忙しいところ監事の宮原守男（虎の門法律事務所）、開原成允（東大医学部）の両氏にお世話になりました。厚くお礼申しあげます。

本年度は、外部委託により本学会の運営が円滑になるかをみる試金石の年です。思わぬ出費や今後の印刷費の騰貴等を鑑み、予備費を多目にとらせていただきました。会員諸氏の会費完納を心からお待ちいたします。（事務局・岩坪）

昭和57年度　会計予算

収入	57年度予算	56年度実績
前年度繰越金	2,351,204円	2,446,107円
学術定期刊行物補助金（注1）	770,000	770,000
57年度会費	4,740,000	3,716,500
（正会員680人×5,000円）	（3,400,000）	（2,544,000）
（準会員100人×3,500円）	（350,000）	（212,500）
（賛助会員　33口）	（990,000）	（960,000）
他年度学会費	400,000	678,000
学会誌売上金	400,000	303,680
預金利子	200,000	210,702
計	8,861,204円	

支出	57年度予算	56年度実績
学会誌製作費	5,328,600円	3,898,594円
（和文誌　9巻2号（注2））	（900,000）	（8巻2号，9巻1号計）
（〃　10巻1号）	（900,000）	（1,365,200）
（〃　10巻2号）	（900,000）	（№10，11計）
（欧文誌　№12）	（1,314,300）	（2,533,394）
（〃　№13）	（1,314,300）	
月例会費用	90,000	35,000
各種委員会活動	250,000	213,060
学会事務委託費	1,200,000	1,002,020
（管理費）	（60,000）	（原簿作成）
（発送手数料）	（832,700）	（533,500）
（漢字処理加算費用）	（93,000）	（経常経費）
（新入会員・異動処理）	（176,000）	（468,520）
（その他）	（38,300）	
人件費	150,000	67,200
印刷費	400,000	297,800
通信費	700,000	679,510
消耗品費	50,000	33,206
交通費	10,000	590
会合費	100,000	57,050
雑費	15,000	12,125
予備費	567,604	0
計	8,861,204円	

（注1）　内定額

（注2）　56年度未発行の分

昭和56年度　会計決算報告（自昭和56年4月1日～至昭和57年3月31日）

収　　入	決　　算	予　　算	増　　減
前年度繰越金	2,446,107円	2,446,107円	0円
学術定期刊行物補助金	770,000	770,000	0
56年度学会費	3,716,500	3,870,000	△ 153,500
正会員4,000円×636人	2,544,000	2,600,000	△ 56,000
準会員2,500円× 85人	212,500	250,000	△ 37,500
賛助会員30,000円×32口	960,000	1,020,000	△ 60,000
他年度学会費	678,000	450,000	228,000
学会誌売上金	303,680	400,000	△ 96,320
大会講習会決算残高	489,790		489,790
第12回 講習会	111,910		
第13回 講習会	173,255		
第9回 大会	204,625		
抄録集等収入	161,200		161,200
預金利子	210,702	100,000	110,702
計	8,775,979円	8,036,107円	739,872円

支　　出	決　　算	予　　算	増　　減
学会誌制作費	3,898,594円	5,132,700円	△1,234,106円
和文誌8巻2号（注1）	614,400	850,000	△ 235,600
〃 9巻1号	750,800	850,000	△ 99,200
〃 9巻2号	0	850,000	△ 850,000
欧文誌 №10	1,255,694	1,291,350	△ 35,656
〃 №11	1,277,700	1,291,350	△ 13,650
月例会費用	35,000	60,000	△ 25,000
各種委員会活動	213,060	200,000	13,060
学会事務委託費	1,002,020	1,211,000	△ 208,980
新原簿作成費	533,500	661,000	△ 127,500
経常経費	468,520	550,000	△ 81,480
人件費	67,200	150,000	△ 82,800
印刷費	297,800	250,000	47,800
通信費	679,510	700,000	△ 20,490
消耗品費	33,206	50,000	△ 16,794
交通費	590	10,000	△ 9,410
会合費	57,050	100,000	△ 42,950
雑費	12,125	10,000	2,125
選挙費用	128,620	128,620	0
予備費	0	33,787	△ 33,787
次年度繰越金	2,351,204		
計	8,775,979円	8,036,107円	739,872円

（注1）　55年度未発行の分

メキシコの世界社会学会議に出席して

鈴木達三

8月16日から1週間、メキシコ・シティで世界社会学会議が開催された。36のシンポジュウムと37の常設研究分科会の研究集会および臨時研究会等が並行して行われた。予稿集からみると提出論文数は千以上、参加者は世界各国から3千人にのぼる。日本からの参加者は60人以上で、当学会からも林理事長はじめ数名が参加した。

筆者が出席発表したのはシンポジュウム26の「生活の質とくらし方」でオーガナイザー兼司会はハンガリー科学アカデミー総裁のA・サライ教授であった。国際会議にふさわしく報告者の国籍は多彩でカナダ、ソビエト、フランス、フィンランド、ハンガリー、イギリス、ベルギー、ポーランド、アメリカおよび日本である（ラテンアメリカからの参加を要望したが実現しなかったとサライ教授は残念がっていた）。このシンポジュウムでは(1)「仕事に重点をおいた生活に関する研究の最近の進歩について」および(2)「価値観と生活の質、くらし方に及ぼすその影響に関する国際比較」の二つのセッションが行われた。

第一のセッションでは「生活時間とくらし方」に関する報告が注目された。丁度、第10回行動計量学会の特別講演においてもNHKの中西氏が日本における生活時間調査について講演されたが、ここ20年以上にわたる生活時間調査の蓄積の上に国際比較研究の計画が進行中の分野である。

第二のセッションでは、フランスのステゼル教授およびベルギーのドルーズ教授の「ヨーロッパ9ケ国の価値観比較調査の概要」および「戦後日本における価値観の変化」（林）「くらし方に関する日米比較」（鈴木）等の価値観の比較研究が報告された。

ヨーロッパの価値観調査はEC諸国が計画し、その後日本、アメリカ等も参加した国際比較研究調査である。ヨーロッパ9ケ国の比較分析の結果は、今秋まとまる予定とのことであるが、報告の印象では「ヨーロッパは一つ」ということのようである。

私どもの発表は統計数理研究所国民性調査委員会が実施してきた「日本人の国民性調査」の結果を元に分析したものである（これに日米比較調査を加えた）。

これらの報告を通してみると、社会学の分野でも調査データに基づく計量的・解析的接近がますます普通のことになりつつあること、特に国際比較調査に基づく相互理解のためには、科学的方法による特色あるいは共通性の抽出等がますます重要になると思われること等、行動計量学的手法の活躍する分野が今後拡大するように思われる。とはいっても、この一週間の大会をかえりみて、随所にみえるわれわれとは大変異なると思える「メキシコ流のものの考え方」、これを調査データに基づいて計量するのは大変困難（あるいは不可能?）ではあるまいかという感を深くした（行動計量学の進歩によって可能性が高まるかどうか、今後の動向に期待したい）。

最後に、大会運営について一言のべる。4年ごとの大会が、新しい学問水準を示す場であるばかりではなく、第一級の研究交流の場であることを考えるとき、会場が至近距離とはいえ3ケ所に分散している場合、会場相互の交通手段がうまく確保されていないと思わぬ支障が生じることになる。また大会全体を統括する事務局が絶えず適切な情報を流す努力をする必要がある。すべての参加者が一日に一度は立寄るような場をもうける必要がある等……不自由な経験から教えられることが多かった。

（日本行動計量学会会員・統計数理研究所）

月例シンポジウム記録

○第三十一回〝ディスプレイによる統計的解析〟（オーガナイザー駒澤勉　統数研）

昭和五十七年八月三十日、統数研、参加者四六名。

第14回講習会の記録

昭和五十七年七月二十七日～二十九日、ホテル立花（草津。群馬県）、合宿による「数量化の総合的研究」、講師・脇本和昌、田中豊（以上岡山大）、駒澤勉、林文（以上統数研）、岩坪秀一（大学入試センター）の五氏、受講者二三名。

なお、今回の講習会は、8ページに記すように、従来とは異なる形式で行われた。

公開講演会アンケートの結果

本年度の大会では、第十回大会を記念して、一般向けの公開講演会を行いました。大会の四日目であったことや夏期の土曜日であったこと、また会場の日経ホールが広かったことなどで、必ずしも盛況とはいえませんでしたが、おおむね好評のうちに終えることができました。

当日、今後の参考のために、アンケートをとりました。ここにその概要を報告します。

回収総数は66でした。うち会員（準会員を含む）が55％で、参加者のほぼ半分の45％が非会員ということになります。性別では、男性がちょうど三分の二、女性が三分の一という比率でした。年齢分布は、二十代23％、三十代29％、四十代35％、五十代8％です。若い人が少ないようで、学会の将来を考えるとやや気になります。

参加者の居住地は、やはり東京都内が55％と多く、関東地方まで含めると82％になります。それ以外の地方の方々は、大会四日目ということで残念ながらご遠慮なさった、というところでしょうか。大会三日目の夜にでもすればよかったのかもしれません。

職業は、いわゆる研究人間がやはり多く、大学教官等30％、研究者12％、公務員と答えている人17％、会社員24％、学生6％、その他11％となっています。学会としてももっと一般の人にも興味深いテーマに取組み、それを広める必要があるでしょう。

さて、この講演会を知ったのは会報でというのが26％、大会プログラムでというのが29％、友人知人に聞いてが20％、勤務先というのが8％で、ポスターを見てというのは14％でした。当然ながら、会報と大会プログラムでというのは会員がほとんどです。今回はマスコミを通じての宣伝が十分ではなかったことと、ポスターを張り出したのが若干遅かったということなどから、一般向けの公開講演会という目的は達成できたとはいえないかもしれません。

しかし、このような公開講演会を今後も催すのがよいというのが96％もあり、係としてもうれしいことでした。開催頻度については毎年にでもというのが36％、二・三年ごとにでもというのが20％であり（ただし、無記入が32％）、記念大会ということにこだわらなくてもいいのではないでしょうか。

行動計量学的手法により開催の日時をうまく設定し、より興味深いテーマを選んで、公開講演会を開くのは有意義なことだと思われます。これについては、講演会に出席した理由（MA）が、演題に興味があってというのが60％、講演者の話を聴きたくてというのが23％、映画というのが6％ということからわかるように、演題と講演者が魅力的ということが重要であるといえるでしょう。

最後に、公開講演会や大会について貴重なご意見をお寄せ頂きました方々に、厚くお礼を申しあげます。今後の大会実行委員会に引き継ぐことにより、皆様のご意見を生かして参りたいと思います。

（第十回大会実行委員・中村隆）

学会費納入のお願い

五十七年度会費（正会員五千円、準会員三千五百円、賛助会員一口三万円）を未納の方は大至急ご納入下さい。五十七年度以前の分を滞納している方はもちろんのことです。健全円滑な学会運営のためには「滞納」は重大な障害となります。納入ご協力お願いいたします。

送金は、郵便振替（口座番号　東京九一　五五二四七、加入者名　日本学会事務センター）でお願いします。その際振替用紙の連絡欄に「**日本行動計量学会○年度会費**」と必ず記入して下さい。

第十回大会発表論文抄録集の購入を希望される方へ・・・

第十回大会の論文抄録集に残部があります。ご希望の方は郵便振替で左記宛に四千円（含送料）をお送り下さい。なお、通信欄に「**第十回抄録集購入**」と明記下さい。

◎請求先：〒一五三　東京都目黒区駒場二―一九―一　大学入試センター研究部　岩坪秀一

◎振替：東京八―一四八〇五六、日本行動計量学会（左欄の年度会費の振替先とは異なるのでご注意下さい）

なお、過去の大会の論文抄録集にも残部がありますので、同様にお申込み下さい（第三回は残部なし）。

第一回：一千円。第二回：一千五百円。第四・五回：二千円。第六・七回：二千八百円。第八回：三千三百円。第九回：三千五百円。（いずれも送料を含む代金）

合宿による講習会を開催して

第14回講習会は、これまでと趣向を変え会場を草津温泉に設定し、本号6ページ最下段左に記すように2泊3日の合宿形式で行った。

この講習会では、数量化法の入門から最近の研究成果にいたる巾広い内容を取上げ、日頃の疑問や現在かかえている諸問題について活発に討論しうるように配慮した。そのために、参加者数を少人数にしぼり、合宿形式で行ったわけである。

第一日は午後3時から5時まで岩坪秀一氏により3-Way数量化法についての最近の研究成果の詳細な紹介・解説が行われた。そのあと、夕食時に簡単な自己紹介を行い、7時から10時まで岩坪氏を囲んでの自由討論会をもった。ここでは、数量化法についての忌憚ない意見や疑問点が提示され、数量化法の誕生から現在にいたる発展過程とその意義、根本概念など活発な討論がなされた。数量化法の生みの親である林知己夫先生が出席されなかったのが残念に思えたほどである。

第二日の午前は田中豊氏により『多変量統計解析法』をテキストとした数量化の基礎的研究が行われた。この3時間に及ぶ講義でもまだ時間が足りず、午後の前半に脇本和昌氏が補足した上で、グラフ解析を紹介し、後半に林文氏よりMDAと3モードデータ解析についての最新の数量化法が披露された。また、夜は第一日目同様の自由討論会が開かれ熱のこもった質疑応答が展開された。

最終日は駒澤勉氏の医学データをもとにしたデータの構造についての卓見および数量化法をいかに現場に役立て使いこなすかの具体的方法が詳述された。

またたく間に2泊3日のスケジュールが完了したが、参加者全員の熱のこもった真摯な態度は今後の行動計量学会の発展に大きく貢献するという感想をいだいた。関東においては初めての試みであった合宿による講習会の成功は幹事一同の喜びである。

今後もサマーゼミナール形式での講習会を実施していきたいと思っている。

（運営委員会講習会係・丸山久美子）

会員の声　初めての調査体験

茂呂田　七穂

今春会員になったばかりの若輩です。最近ある研究会の調査に加わり、女性経営者・管理職者のインタビュー調査を行いましたのでその体験談を一つ。

何と言っても大変だったのはアポイントメントを取り付けるまでです。予め書面にてインタビューを依頼しその上で電話でお願いしたのですが、何分実業界に疎い一院生のこと、電話口に誰が出てくるのか、いきなり社長さんや部長さんに取次いでもらってよいのかわからないことばかり。顔が見えないので声で相手を想像するしかなく、不安にかられつつもヒシと受話器にしがみついてひたすらお願いしました。しかし案ずるまでもなく、皆様親切で、かなりの方が見ず知らずの女の子の突然の依頼に快く応じて下さいました。もっとも中には、「社長は只今外出しておりますがまもなくもどると思います」の返答に、一時間おきに五、六度電話し、その挙句「その件でしたらもうお断りしてあります」とガチャンとやられたこともあるけれど。

実際お会いしてみると、皆様積極的でテキパキとした方ばかり。お話も淀みなく次から次へと湧いてくるようでした。会社の機構や経営システム、事業内容等に全く無知な私は時にはトンチンカンな質問をしたかもしれませんが、若輩へのアドバイスも含めて詳しく丁寧に答えて下さいました。こうした親切な応対は、もしかしたら同性故かな、同性のヒヨッ子がわけがわからずも何やら頑張っている、それで手助けしてあげようという気になったのかなどとも思いました。これが男性経営者・管理職者でしたら別の反応があったかもしれません。いつの日にか、男性の方々のインタビュー調査もやってみたいものだと思いました。

（日本行動計量学会会員・東京大学社会心理学大学院生）

編集後記

本号は、大会直後の号ということで、例年通りの8ページ建てで編集しました。次号は来春早々にお届けしたいと思っていますが、記事を集めるのに苦労しています。会員諸氏からのご投稿を期待していますのでよろしくご協力下さい。